



俺たちのザ・ソー

THE SAW, OUR HERO!

俺たちのザノウ



THE SAW, OUR HERO!

この物語はフィクションです。

登場する人物・団体・組織などの名称、また事件などは
すべて架空のものです。

実在の人物・団体・組織・事件とは一切の関係がありません。

また、如何なる思想、良心および信仰等を
肯定もしくは否定する趣旨のものでもありません。

加えて、本作品の内容は、暴力等の犯罪行為その他、
あらゆる反社会的・反人道的行為を
肯定および助長するものでもありません。

クロヒス諸房 トオノキョウジ

ビルの屋上に鎮座しているのは、もはや誰一人として乗る者のない遊覧船。津波に運ばれ無理矢理に担ぎ上げられた、その日その時のままだ。生牡蠣なまがきい色の空の下、それは地上十メートル強の玉座で一人、卑屈に廢墟の街を見下ろしていた。

甲寛人と十人ばかりの仲間達は、固唾を呑んでそのビルを遠巻きに取り囲む。いや、彼らを取り囲んでいるのはビルではなく、その視線の先にいる一人の男。男は手にした巨大な赤いチェーンソウを軽々と振るい、ビルの壁面にがっんと突き立てた。

「ふぬんっ！」

男は刃を壁にめり込ませたまま、自分の荒い鼻息を合図に瓦礫の地を蹴って駆け出す。筋骨隆々の男の体躯。そして、それをはるかに上回って巨大なチェーンソウは、画仙紙に筆でも走らすかのように易々と、鉄筋コンクリートのビル壁面に傾いた一文字を描きながら、その切り込みを伸ばしていく。

男はそのまま壁面に沿って駆け、角を曲がって尚、ビルを挟みながら突き進む。寛人と仲間も言葉を失ったまま、走って彼の後を追う。

一分もかからずビルの周りを一周する。時折強引に軌道を修正しながらも、男のチ

エーソウは徹頭徹尾止まる事は無かった。描いてきた長く太い一文字は、見事にその発端と終端を繋いだ。

水流を呑む鹿威しの如く。僅かずつ。次第に。そして突如バランスを失いビルは崩落を始める。失墜を目前に最期の怒りを叩き付けるべく、男の頭上目掛けて船は落ちる。

「おうら！」

男は仁王立ちのまま、片手でチェーンソウを振り上げた。空き缶でも放り投げるような雑なモーシヨン。だが昇り龍が滝を割るより遥かにあつさりと、刃は船を真つ二つに分断する。ビルの上半身もずりと崩れ、墜ちた王を追いつがるかのように、男の真上に倒れ込む。

「いよっ！」

腕を引くついでとばかりに、それすらも事も無げに斬り払うその男。ビルと船だった大質量の塊が、彼の両脇にどずんと落ちる。大気を千切つて唸る刃が、元は船だったその鉄塊をさらに二つに斬つて割る。

そして間髪入れず背中中の細長いバググから抜き放った、上下二連のショットガン。
「そらっ！」

跳ね上がった二つの破片は、立て続けに響いた四発の銃声と共に飛散し地に落ちる。

男が何を始めたかを数秒遅れて察した寛人達は、一斉に頭を庇って身を屈め、地に伏せる。

構う事無く男は刃を振るい、トリガーを引く。時折銃身をくると回して小脇に抱え、空いた左手をズボンのポケットに突っ込み、驚ぶかみに取り出した弾薬を器用にちやんちやんちやんと装填していく。右のチェーンソウで斬り、左のショットガンで撃つ。巨大な瓦礫を裂いては砕き、鉄筋と壁を断つては貫く。

やけにリズムカルに刻まれる、銃声と破砕音のビート。十秒、一分、続く斬撃、繋がる射撃。

そして唐突にそれが途絶えた時、寛人達は恐る恐る顔を上げた。

連日の報道のせいで被災地のシンボルとなりかけていた不遇なビルと遊覧船は、数分ばかり寛人達が呆気に取りられている間に、たった一人の男の手で、細かな瓦礫の山と化していた。屍の船と朽ちた玉座は、今ようやく眠りにつく事ができたのだ。

「よし、一丁あがりだ」

男は満足げに一人呟き、寛人を振り返ってにかつと笑う。

「あ、ありえねえ……普通じゃねえって」

「すっげえ、マジかよあのおっさん」

男の大立ち回りの成果をその目にした寛人達は、あんぐりと開いたままだった口を

動かし、辛うじてそんな言葉を脳から絞り出した。たった一人で、ものの数分。本来であれば何台もの建設重機を動員し、綿密な解体計画を立てて少しずつ取り組むべき大工事になる所だった。それをこの男はチェーンソウとショットガンに物を言わせ、工程のほとんどを正しくぶった斬ってしまったのだ。

「とりあえず、こんな感じでいいか？ 寛人君」

振り返りそう訊ねた男は、息一つ乱していなかった。復興対策本部から供給される青い作業着を、ぶ厚い胸板と豪腕に窮屈そうに羽織っている。サラミ・ソーセージの詰め合わせのような太い指ががちりとスイッチを切るまで、チェーンソウの刃はうつすらと光を放っていたようにも見えた。

「う、噂通りなんてもんじゃないスね。麻羽さん」

「噂？ 悪名の間違いじゃないのか」

深く皺の刻まれた頬を、男は綻ばせる。唇の片端をきゅつと吊り上げて、寛人に向かってにやりと笑った。

その男、麻羽壮太郎（あさば そうたろう）。株式会社麻羽工業代表取締役、齢七十二歳にして、同社唯一の現場作業者。現在は建造物の解体と処理を主な事業とし、破天荒なその手法は元より、その恐るべき速さと確実さで、瞬く間に業界内外にその名を轟かせた。

「悪名っていうか、通称『ザ・ソウ』とか。どこのアメコミだとか思ってたけど……それどこじゃないっすよ、これ」

興奮を隠せない寛人が、噂のその名を口にする。彼の周りの男達も、ひきつり笑いで頷き合う。だが、当の男は小さく肩をすくめてさりとて言う。

「DCやマーベルのようにはいかんさ、夢え壊しちゃったんなら悪かったね」

解体屋『ザ・ソウ』。無論男の本名と振るう得物が、その通り名の由来だった。古希を経て未だ衰えを見せないその肉体と、正確無比の射撃の手腕。そして何より、一般流通に存在し得ない巨大で無骨なチェーンソウ。キャタピラのような極太のチェーンの刃が刀身を覆い、ハンドル部と一体化した発動機は子供一人分ほどの大きさがある。その全長は、百九十センチは確実にある麻羽の長身をゆうに上回っていた。

その巨大さ、そしてそれを軽々と扱うその豪腕。一度その目にした者ならば、確かに忘れられる筈も無いだろう。

「そ、そんな事ないですって！ なあ、みんな？」

「……そつスよ！ スゲっすよ、ヤバかったつス」

「あんなの俺ら、どっこの現場でも見た事無えって！ おっさんパネえつスよ！」
麻羽や寛人と同じく青い作業着に身を包んだ青年たちが、二人の下へわらわらと駆け寄ってきた。寛人より若く、少年と言っても過言ではない年頃だった。茶髪に金髪、

作業現場に見合わないロングヘアやピアス。ままならない丁寧語にひたむきな敬意を懸命に込めて、興奮と好奇心に輝く眼差しを、麻羽やその手の得物にぶつけてくる。

「ショットガンでぶっ壊すとかまじパネえって！ 散弾ってこつち飛んで来たりしねえの？」

「弾薬は単発だよ。ショットガンだからって散弾しか撃てないわけじゃあない」

鼻ピアスの小柄な少年が触ろうとしたショットガンを、ひよいと持ち上げ、革製のガンケースにするりと収める麻羽。

「マジで。それ知らなかったわー！ タマって結構金かかんじゃねえの？」

「何、お前さん達雇って働かすよりやよっぽど安上がりさ、ちゃんと外さず当ててりやあな」

取り囲む青年たち一人ひとりに、皺深い強面の笑顔を振り撒く麻羽。口調は乱暴だったが、自分に向けられる若者達の純粹な興味を、彼は一つたりとも無下にする様子は無かった。

「てか麻羽さん、マジマッチョなんスけど！ ちよつと腕触っていいスか！」

「おい新居、あらうりた瓜田もやめとけって。麻羽さんにぶっ壊してもらう廃ビル、まだいくらでもあるんだからよ」

寛人は苦笑しながら、彼らを制して麻羽から少し引き離す。見世物は終わりだとは

かりにパンパンと手を叩いて見せると、彼らの顔も空気も少し引き締まる。

「こんなすげえコトやってもらったんだ、さっさと瓦礫カタすぞ。瓜田はトラック寄せて、他はズタ袋どんどん詰めてつて。ほら始めつぞ、ケガすんなよ、よろしく！」
うーす、あーいと各々が声を残し、がしやがしやと瓦礫を踏み崩しながら散っていく。面倒くさげに聞こえるその返事と裏腹に、動きはきびきびと気力に満ちていた。

「さて、俺らはこっちっす。麻羽さん」

寛人は動き始めた仲間達を見届け、再び麻羽を振り返る。その時麻羽とぴたりと目が合い、寛人は少し面食らった。今に限った事では無いが、この人はやけに自分の事を親しげに見ているなど、寛人は感じていた。

「今週中にはその通りの……その、建屋が並んでる一帯をやつつけちゃいたいと思うんですけど、どうっすかね」

麻羽は寛人が手で示す方を見た。廃ビルと言っても二階から三階程度の小さな建物ばかりが並ぶ、港から続く商店街の跡地だ。

そこにあるのはほぼ全てが、津波に沈んで腐食し、骨と皮ばかりになって残っている、建物とは名ばかりの瓦礫の塊だった。店構えを彩る看板やのぼりは一つたりとて残っておらず、外れた庇や雨どい、トタンと木材で出来た瓦礫の山に、僅かにその賑わいの名残を残すばかりだ。

「解体だけなら、今日中にや出来らあな。問題はこの瓦礫の山ア、どうする気なんだって所なんだが」

自分達以外に人気の無い周囲をぐるりと見渡し、麻羽は呟く。

「気休めにしかなんないでしょうけど、国道向こうのでつかい採石場、ほとんど期限なしで借りてるんす。オーナーの爺さん婆さんに俺らの事を話したら、そういう事ならぜひ使ってくれて。旧式だけど、破碎設備も使っていいって」

「へえ、流石だな。やるじゃねえか」

「さ、流石って事も無いスけど……その後どうするかって、まだ決まっちゃいないし」腕組みをした麻羽がうんうんと頷く、やけに感心した風な仕種。

寛人には麻羽のそんな態度が、少し奇妙ではあった。今日が初対面だというのに、まるで親戚の小父さんみたいなの口ぶり。だが、寛人にはそれが不思議と嫌ではなかった。

「ドカタの俺らでまずやれる事つつたら、この瓦礫と廃ビルになっちゃった町を、何とかしてサラ地に戻す事だっと思ってるんすよ。土地だけ何とか空けちゃえば、新しい仮設住宅だっって配給所だっって建てられるんすから……んじゃ、そこの端から行きましょう」

麻羽と寛人は頷きあい、瓦礫の山あいに辛うじて残された細い車道へと向かう。

いつ何を踏み抜くか知れない瓦礫の獣道を、時折つまずき、よろめきながら二人は歩く。足を一歩進める毎に鳴るぐしやり、がしやりという耳障りな音に、寛人は閉口する。

「なるほどね。とりあえず、お前さん達のやりたい事は良くわかった。一応聞くが、工事の許可も取れてると思っていいんだよね」

「ええ。ココで俺らがやる工事は全部、復興対策本部のNPO法人が手続きを代行して済ませてくれてる筈っす。麻羽さんの事も、普通の請負業者さんってだけしか報告してないスけど、まあ多分大丈夫っしょ」

NPO法人ね。含みのある口ぶりで呟きを漏らし、麻羽は一人にやりと笑う。彼が何を言いたいか、おおよそ寛人はわかっていたつもりだった。お役所仕事の隙間に入る、いかにも怪しいNPO法人。ゴシップな匂いが漂ういかにもな構図が二人には見えていたが、お互いにその続きを口にする事もせず、奇妙な沈黙を保ったまま、瓦礫の道の歩みを進めていった。

「んじゃ、ちよつと離れてな寛人君。袋に詰め込める程度に砕いときゃいいんだな？」

「はい、お願いしやす！」

寛人の返事にどるん、と再び唸りを上げる、麻羽の巨大なチェーンソウ。果ての見えない瓦礫の野に、懸命に働く男達の声が響く。

戸の無い広い一階に無造作に転がっているのは、腰ほどの高さの冷蔵庫や、汚れ碎けた発泡スチロール箱。かつては魚屋であつただろう主無きその建屋に、男は迷い無くその刃を突き入れた。



麻羽壮太郎 (あさばそうたろう)

株式会社麻羽工業、代表取締役。
72歳にして壮健、筋骨隆々。
やや悪人面で言葉は荒いが、
揺ぎ無い正義感と信念を力に、巨悪に立ち向かう。

特注チェーンソーとショットガンを用いた
独自の鉄筋コンクリート建造物解体業務は、
その恐るべき迅速さと確実さに定評がある。